クオリア

天童ジョバンニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クオリア

【Ｎコード】
Ｎ２８３９Ｒ

【作者名】
天童ジョバンニ

【あらすじ】
秘密の医療研究を手がける
地下組織「生情会」の一員であるフミヤが
自らのクローンであるアルビノとの愛を育むという
ファンタジックなしかし骨太な作品である。

クローンとして作られながら
純粋で真っ直ぐな心を持つアルビノ。
忌まわしい過去と戦いながらも、アルビノを愛し

その愛ゆえに魂を救われてゆくフミヤ。
そして彼等をめぐる「生情会」の心温かな人々。

彼等が生きる舞台は決して幸福で明るいものではないが
アルビノをつうぢて彼等の心が繋がり　癒され
生きる力を見出していく課程は力強い希望に満ち、読み手の心を打つ。

（という感想をいただきました／（＾ｏ＾）／）

01＋02

自分の存在を【謎】であると
適当な薄っぺらな存在として表現するほど
他人の気を引くようなクダラナイ行為はしたくない。
しかしどうしても【母国】というものが存在しない僕は
祖国を離れ母国という存在すら無くなった今
自己というものが常に曖昧な状態になってしまっている。

僕にあるのは浅い記憶と今。
人は僕のことを、ただ【フミヤ】と呼ぶ。

あまり古すぎる記憶は祖国と共に捨ててしまったつもりだが
僕の脳は　寄生虫で出来ているのか
生々しい謎の軟体動物の絡み合いで出来ているかのように
脳のようで　脳でない。
頭皮の奥に隠された　別の生物のように
思考を餌に　ドクドクと泡立ち　うごめいている。

●

僕はソ連の小さなアパートの一階に　洋菓子店を営みながら
両親と妹との４人で生活していた。

父は洋菓子職人で　バームクーヘンを得意としていた。
家の中は　母の作る料理よりも
父の作る甘いお菓子のにおいにあふれていた。
機械を使わない　父の手作りのバームクーヘン。

一年中暖炉は赤く光り　炎の上には　黒くこげた太い金属の棒。
回り続ける砂糖と卵の焦げた　香ばしいにおい。
売られるお菓子。仕事をする父。客を迎える母。
いつも誰かの声が聞こえる家だった。

僕は毎日母から少ないお金を受け取り
朝早くから働く両親に代わり
パンを買いに走る役割を与えられていたのだが
母国の歴史が動く起爆剤になった日も
僕は変わらず毎日の役割を果たすため
外の寒さに備え、防寒具を着込み
曇った空の広がる下をパン屋目指し走っていた。

そのとき　毎日の風景が
僕の目の前で変化した。
いつもの仕事を
いつもどおり終わらせ
何もかもが【いつもどおり】に終わるはずだった。
それなのに　誰も予想しないタイミングで
僕が走り抜けた道に止めてあった車が爆発した。
僕がその車の隣を横切ったときは
まだ何も異変は無かった。
だが　その車を通り過ぎた直後
背中の方から　恐ろしい爆音と爆風と砂煙がきた。

音は当然すごく大きかった。
だが、言葉の無い無言の音だというのに
なんて心に突き刺さる音なんだろうと
今でも　あのときの爆音を聞いたときの心境は忘れられない。

暴力的な爆音の奥から
神のような絶対的な存在が
『死ね！』と僕に叫んだのではないかと思うほど
激しく憎悪意味が　僕の鼓膜から　胸に突き刺さった。

そして僕はその言葉に
『ごめんなさい』と強く念じながら
恐怖にしゃがみこんだ。
一瞬での出来事ではあったが
僕は確実に命の危険を感じていた。

必死に祈った。　生きたいと。　死にたくないと。

そして　爆風が砂煙を巻き上げる中
背後に広がる大人たちの悲鳴と銃声。
これからどするべきかと
怯えながらも振り返った僕の目には
一生忘れられない映像が映った。

僕の後ろで　妹が燃えていたんだ。

車のフロントガラスの破片に包まれ
あお向けて倒れ　そして　燃えていた。

妹の体が燃えていく。
人体が燃え　こげることにより
筋肉と皮膚が縮まる光景を
僕は妹の体で初めて見た。
仰向けで倒れていた妹の腕が
突然　ピンと

音も立てずに
空に向かって伸び
椅子もないのに
太ももが持ち上がり
膝も曲がる
そして　背中だけが
地面に甘えている状態になった妹は
バランスの悪い花瓶が倒れるように
僕の方に　ぱたん　と倒れた。
妹の顔は見えなかった。
目も鼻も髪も無かった。
ただ　黒く焼け爛れた顔から
さらに黒くすすだらけになった口が
地獄への入り口のように開いていた。
妹は　僕を見ていた。
妹の開いた口の奥から
僕の体まで燃やしてしまいそうな視線を感じた。
あの世に続いているような　真っ黒な妹の口腔内。

僕は　大切な妹に恐怖を感じてしまったことで
自分は兄として　人として　何かが終わってしまったように感じた。

あのときの気持ちは
何度思い出して整理しようとしても
ぐちゃぐちゃとしていて
悲しかったのか怖かったのか怒っていたのか
はっきりと自分でも掴むことができない。

そんなぐちゃぐちゃの時
僕は　誰だかわからない大人に銃で左わき腹を撃たれたんだ。

壊れた心を抱きしめているのも辛かったのだけ　とてもよく覚えている。
だが、痛くて苦しかったのは　初めの一瞬だった。
息をすることや　生きようと願うことが
自分の肉体を酷く痛めつけているということを　一瞬で悟り
もう　生きることを諦めるべきだと思った。
呼吸を手放し　脈を手放し　魂を手放そうとしていた。

そうしたら不思議なんだ。
横腹から流れ出る血液が　まるで我慢し続けた後の放尿のような快楽。
ゆっくり感じる自らの体温の低下が
空気に自分が溶けていくようで　ぬるい湯の風呂に全身が入っていく様。

痛みもあったはずなのに
さっきまで恐ろしかったはずなのに
急に曇り空が晴れ、青空すら見えて、謎の爽快感を得ていたんだ。

テロは悲しい事件だよ。

なのに　こんなに心地よいイメージを抱いたなんて
僕はもう既に　身も心も傷ついて　壊れていたんだろう・・・。

●

パチンと指が鳴らされ
その音により　僕は　ふと我に返った。
目の前には　バームクーヘンがあった。
真っ白な部屋に　白衣の男がいた。

あぁ　そうか。
僕の眼球は　この白い男により
裏返しにさせられ
見えないはずの己を無理やり見つめさせ
失いかけている記憶を呼び戻したんだったな。
現実が少しずつ自分に戻ってきたぞ。

目の前の男は
ペンライトを僕の目の前をちらつかせ
僕の眼球を　この男は操っていた。
僕はそれを拒まない。拒む理由がない。
僕には　何に関しても動機も理由もない。
僕に指示するやつがいたら何でも従う。
だから僕は　無心のまま　この白く四角い部屋で
男のペンライトを見つめ黙って眼球を好きに遊ばせてやった。
目の前にあるバームクーヘンを見つめていると
僕の回転する眼球に
水分に溶けた涙が絡み
溢れるマグマのような感情で
涙腺から生産された　塩分素材はどんどん焦げていくよ。
それでも男は眼球に
素材を注ぎ続ける。
焦がして注がれ　焦がして注がれ
僕の眼球はもう何重にも　焦げて膨らんでしまった。
もう僕の眼球は　僕の体に収まらないよ。
僕の目は　この男により　バームクーヘンにされてしまったのか。
ふふ。　そんなことはあるわけないよな。
だけど何なんだろう、この妄想から得られる
恐ろしいほど確かな実感。

眼球が大きく膨らんでいく感じは確かにあった。
泣いてなんていないさ。　僕は涙なんて流さないよ。
僕の肉体と心、なんて可笑しいんだろう。
可笑しくて　可笑しくて　しょうがないよ。はははは。

そんな馬鹿なことを考えてるうちに
僕はまた　我を失っていく・・・。

●

僕という人間が妄想に揺られ
この世から得られる実感が薄らいでる間に
僕の過去をもう少し話そう。

僕の妹は　テロという歴史小さいな蠢きの犠牲者である。
小さな命だったが
歴史の中の一つの命として　年表に隠れて妹は組み込まれた。
その後　僕は両親とは会えていない。
僕が死んだと思い込み
親戚と共に　どこかの国へ亡命したんだと思う。

テロに巻き込まれ　銃で撃たれた　身寄りの無い僕を
ある医者が僕を拾った。
その男の名はオルディノフ。

彼はロシア人でありながら
日本の軍事研究集団の関係者の一人だった。
本来なら　そのような集団は日本には存在しない。
だが、それは公にされていないというだけの話だ。
戦争も終わったというのに

研究でしか存在価値が見出せない知識馬鹿が集まり
ひっそりと　世間の目に触れられない場所で
こつこつと科学を進歩させている組織がある。

その組織の名は【生情会】。

様々な薄気味悪い研究を進めているという集団の一人に
僕は運悪く拾われてしまったのである。

しかもオルディノフは
他人を愛することが極端に不器用な男だった。
女を愛することも出来なければ
男を愛することも出来なかった。
何もかもが彼を怯えさせていた。

しかし僕は子どもだった。
彼を怯えさせる要素は何も持ち合わせていない。
僕も彼に命を救われたという忠誠心があった。

そして僕とオルディノフの間に　師弟愛が生まれた。
その愛は、他の愛にも姿を変化した。

寂しい彼を慰めたい一心で
僕は世の中の理を覆してでも　彼の愛になってしまった。
彼が望めばキスもしたし、裸で抱き合うこともあった。
これらが　男と女のものであることや
好意の延長に、そのような行為が
秘め事としてくっついてくることは
幼い僕だったが漠然と知っていた。
だけど僕には　オルディノフ以外

何も大切なものなど無かったし
オルディノフ以外の何かを裏切ることになっても
余裕の表情で生きていけると　本気で思っていたんだ。

オルディノフは僕に自由は与えてはくれなかったが
それ以外のものは　何でも僕に与えてくれた。
僕は　毎日本を読み　テレビを見た。
祖国を知り　日本を知り　男の研究を知り
気がつけば　僕も男と同じように
研究しかできない勉強馬鹿になっていた。

だが　どんなに賢くなっても
小さな妹を守ってやれなかったことを
いつも悔やんでいて
僕はいつまでも自尊心を抱くことが出来なかった。

自尊心もなく
オルディノフだけを言いなりになる僕の前で
二人の関係が徐々に変化しはじめる。
それはきっと僕が時間を得て
自我を手に入れ始めていたんだと思う。

自我が目覚め
オルディノフとの秘め事にも
具体的な疑問を抱くようになった頃
オルディノフは僕を手放したくないと
僕を地下室に監禁した。

その際、オルディノフにより
無能力剤を打たれ　廃人となった僕は

ただ毎日床に転がり　めそめそと涙を落としていた。

それから僕は
その薬物の副作用のせいなのか
精神的な萎縮のせいなのか
身長が伸びなくなり　身体の成長が止まった。

どんなに精進しても
永遠に大人になれる日は　僕には訪れないことが解った。

永遠の少年を喜ぶオルディノフ。
そんなオルディノフを見て
僕は　自分にも　オルディノフにも　絶望した。

だが　そんな恐ろしいほどの無気力と、絶望の中
僕はオルディノフを殺して逃げ出すことに成功した。

自分が死ぬかもしれないというときは
あんなに美しい景色が見えるほどの快楽が得られたというのに
誰かを殺す瞬間というのは　また違う感覚がしたよ。

体の小さい僕が　成人男性であるオルディノフを殺すのは
外傷的な行為では不可能だと思ったから
知恵を活かし、彼に毒を盛って
毒でのた打ち回る男を　小さなナイフで刺したんだ。

毒によりオルディノフは
全身の血管が破裂し　血が胃や肺に流れ込み
ナイフの傷口からの出血だけではなく吐血して
僕の顔に赤い雨を降らせた。

あのときのことは　とてもよく覚えているよ。
他人の血は　なんて気持ちの悪いものなんだろうな。
それこそ　小便をかけられたような気分だったよ。ハハ。

神よ、この話は面白いかい？
そうだろうね。　なかなかこんな話
聞ける機会なんてないだろうしね。

僕も　僕が　とても興味深いよ。　どこまで壊れてるんだろうってね！

ハハハ！　ハハハハハ！

●

再び　パチンと指が擦り鳴る音がした。
『フミヤさん、もういいですよ。
今日はこれぐらいにしておきましょう』
僕の意識が　僕の元に戻ってきた。

ああ、またか。
僕はすぐに過去を思い出すだけではなく
過去に飲み込まれてしまうんだ。
『じゃあフミヤさんには　いつもの安定剤を
研究室のほうに　また送っておきますんで。

またお困りでしたら　いつでも声かけてください』

目の前にいた白衣の男が
ペンライトのスイッチをオフにして
僕の回想の勢いも感じることなく
なんとも軽くご機嫌に言った。

白衣の男は僕のマインドドクターでもあり　部下でもある。
名は『大堀』。
僕が今まで体験したこととというのが
どうも僕の脳や神経にとって健康的なことではなかったらしく
僕は時々　過去のことを　夢か現実か解せなくなり
人として生きるために必要なこと（食事や睡眠）を
全て放棄してしまいそうになるので
周囲からのすすめで　彼に治療をお願いしている。
（だが僕は、病人でもなければ
　この精神状態が変化する日は来ないと思っているのだが・・・）

『そうか、いつも悪いな。じゃあ僕は帰る』
くらくらする頭を抑えながらも　手をハタハタとさせ　立ち去ろう
とした僕に
大堀は慌てて『フミヤさん、そういえば先日
ご自分のクローンを作りたいと　おっしゃってたじゃないですか。
あれ、スタッフのほうが手配できたと
高田が伝えてくれと言ってきてましたよ』と言った。
あぁ　そうだった。　数日前、そんなことを注文したっけ。
『わかった、すぐにでも高田に会ってこよう。ありがとう』
僕は　大堀の元を立ち去った。

フミヤは真っ白な大堀の部屋を出て
限りなく白に近い
灰色の廊下を歩いた。

フミヤが歩くは
生情会　Dブロックの地下研究施設内。

世間一般には公にされていない地下の研究施設は
大きな円を描くように廊下が張られている。
そこを彼はフラフラと幽霊のように歩いていた。
脳と頭蓋骨の間に空気が入り込んだような
ぼんやりとした意識のなか
それを苦痛に感じることもなく
いつものことだという顔で歩く。

そう、フミヤにとって
このような精神状態・身体状態は常。

悲しみも悲しみ飽き
怒りも怒り飽きしているのがフミヤ。
泣いている人よりも悲しい人であり
怒っている人よりも怒っている人。
闇と不幸が彼の魂に根を張り
それが自身だと思い込んでいる。
それがフミヤである。

（今日は妙に頭痛もするし　視界も狭い。
ああ、なんだか胸も苦しいな。
血がいつもより騒いでいる気もする。ああ、もう。あああもう。）

そんなことを考えながら歩き
自分の体の不快感に苛立ちながら
大堀から処方された錠剤を　水も用いず口に入れ　噛み砕いた。

純粋な苦味だけが舌の舌から溢れ出たが
フミヤにとって安定剤は飴玉の様な物。
口に入れることで心と体が甘く溶ける様だ。

安定剤を舌下投与し
あっという間に貧血に似た眩暈のような世界から
アルコールでホロ酔いしたような状態に変わる。
だが　そんな甘い時間は長くは続かず
それから直ぐに
薬物の心地よい存在感は
体の様々な不快な症状を解消しながら
スゥっと消えていった。

そんなことは何一つ表に出すことなく
常に真顔で無表情でフミヤは歩き続けていると
やがて見えてきた目的の部屋である
高田の研究資料室にたどり着いた。

Ｋ－ＲＯＯＭと書かれた扉が
高田の研究資料室。

フミヤは扉の横にある　小さな四角い窪みに
人差し指を近づける。

これは人差し指の静脈を使った
個人認識するシステムである。

正情会の人間として登録されることが　この施設の鍵。
フミヤを認識した装置が　ピピと音をたて　目の前のドアが開く。
そして開いた扉の向こうに
もう一枚の閉ざされた扉が現れた。

フミヤは目の前に現れた　もう一枚の扉の前に立ち
少し顔を持ち上げ　天井に設置されているカメラに向かい
「フミヤだ、クローンの件で来た」と言った。

すると二枚目の扉もスルスルと開いた。

二枚目の扉は内線の役割も兼ねた
声紋認識で開くシステム。
声紋がフミヤを認識し、鍵が解かれ
中にいる高田が　音声を聞き
カメラの映像で　フミヤを確認し
室内に入るのを許可したのだ。

二枚の扉で隔てられていた高田の資料室は　飾り気は無く
研究のために使われる消耗品が入っていたのであろうか
空のダンボールが畳まれることなく散乱し
部屋の真ん中には長机が
パイプ椅子と共に並べられていた。

フミヤはパイプ椅子に座り
殺伐とした部屋をぼんやりと眺めながら
この部屋の向こうにある

高田の研究室内部の光景を思い出す。

高田の資料室には扉が二つあり
一つは　先ほどフミヤが使用した
廊下へ続く出入り口。
もう一つの扉は高田の研究室になっている。
主にクローン創造を手がけている高田の研究室は
培地内で命を授かり
培養水の中に異型の姿の人間たちが
いつか完全なる人となる日を待っている。
フミヤも何度も入ったことのあるが
何度見ても　滑稽でもあり　違和感のある部屋だ。
母は一体なんであるのか
どこからやってきた魂なのか
源がよくわからないままの肉体が
この世にコンニチワ！と愉快に動いているのである。

（あの部屋、あの空間の中で
　次は僕のクローンが作られるのか・・・）

そんなことを考えていると
いつの間にか　体は緊張で体中に力が入り
血流は暴れるように
心臓バクバクと動いていることに　気がついた。

（くそう。さっき安定剤を飲んだばかりなのに
なんでこんなに落ち着かないんだ・・・）

フミヤは思わず上着のポケットに手をいれ
入っている錠剤の瓶を出すべきか　出さぬべきかと

生地の中で躍らせながら考える。

（この症状は　身体の異常から出ているのか
それとも精神の異常から出ているのか・・・。。
身体の異常で思い当たることは　日々の疲れぐらいしかない。
ではこれは精神の異常のせいなのか？
なぜ　今　異常になるのだ？）

フミヤは自分自身に苛立ちながら
この緊張の理由を考えてはみるものの　特に見当たらない。

はぁ、と大きなため息をつきながら
フミヤは（僕は僕が一番面倒臭いよ・・・）と心で嘆きながら
再びポケットから錠剤を出し　素早く口に入れた。

そして　それと同時に
研究室の扉が開き
高田が「どうも」と会釈しながら現れたのだった。

●

高田は疲れているのか
「お待たせしてすいませんでした」と
軽く言った後　自身の腕や肩を回し
コリコリと気持ち悪い音を　一通りたて
その後　ドスリと椅子に腰掛けた。

高田は５０代男性。中肉中背。少々斜視も入っている。
高田の肌は　日に焼けたわけではなく
皮膚の老化と　血液の状態の悪さで　浅黒。

髪はボサボサで白髪交じり。
そんな風貌だから
生情会から支給された
洗濯し　裾まで糊で伸ばされた白衣を着たところで
微塵も清潔感は感じられない汚いオヤジである。

そんな高田を見て
「相変わらず高田は不気味な顔色をしてるな。
不健康な研究ばかりしてるのが滲み出てるよ」と
会話の前菜として　軽く天気の話をするかのように
ニタニタと笑みを浮かべながら　フミヤは嫌味を言った。

すると高田もニタリと気持ち悪い笑みを浮かべながら
フミヤの姿を頭部からつま先まで流し見ながら
「フミヤさんも相変わらず
大人なのか子供なのか判らない、不気味な姿ですねえ」と言い
「ははっ。高田は相変わらずだな。
いつか殺してやるから覚えておけよ」
「お待ちしていますよ」なんて
二人は嫌悪感丸出しの挨拶を交わす。

フミヤと高田は　特に目立った争いはしたことはないが
常に冷たい関係である。
フミヤは正情会Dブロックのトップで
高田はただの研究員に過ぎない。
だから仕事上はフミヤのほうが高田よりも立場が上なのだが
このような雑談などの　どうでもいい場所では
うまく逆手を取られ　不快な思いをすることが多い。
なのでフミヤにとって高田とは
決して積極的に関わりたいと思えない相手であるが

フミヤにとって　一番身近な遺伝子工学系の研究者である。
今回フミヤは　クローンの発注のためだと
渋々　高田の部屋にやってきているのだ。

決して楽しくない前置きの雑談を交わしながら
高田は二人分のコーヒーを作り
一つをフミヤにと差し出す。

「ありがとう」と礼を言った後
表情を少し切り替え　目や頬に力を携えながら
フミヤは会話を切り出した。

「クローンの件なんだが
いつぐらいから創造開始できるんだ？」
フミヤからの質問に対し高田は
う～ん、と低い声で唸り　肘をつき　頭を抱えた。
その様子はどこか違和感があり　フミヤの表情は曇る。

（大堀からは高田が創造の準備が出来たと聞いてきたんだが
高田は一体何を渋っているのだ？）

高田はフミヤの感じる違和感を　知ってか、知らずか、
表情を変えることなくボソボソと言葉を発し始める。

「フミヤさんはクローンというものを
どのように捉えておられるのでしょうかね。
誰が見ても　気を許し安心してしまう幼い風貌をしながら
日夜この研究所内で仲間内で仕事をしているフミヤさんに
クローンを作る理由が私にはわからないのですよ」

高田のその言葉を聞いて　勘のいいフミヤは
これは演技であると気づいた。

一見、フミヤに魂の謎を問いかけ　哲学を促し
フミヤを案じているかのようにも思えるこの言葉の真実は
【お前のクローンなど作る価値はない】である。

そして　さらに言うなら
クローンよりも　フミヤという人間のほうが
高田にとって圧倒的に価値が低い　ということなのだ。

（随分僕も嫌われたもんだ）
フミヤはそう思いながら腹の中のマグマが煮立つ。

このように明らかに相手と静かに争っている時は
感情的になったほうが愚か者として、負けを背負うものなのだ。
なので煮え立つ腹の中の凶暴な自分を押さえつけながら
冷静になることを自らに念じる。

「クローンの依頼の理由は特に無い。ただの趣味で興味さ」
笑うことも　怒ることもせず　フミヤは冷たい無表情で答えてみた。
「なるほど」と短い返事をした高田は
自分の指の逆剥けをいじりながら
「一番一般的で、低予算で作るクローンは
生殖器内で作られた種を使用するんですが
フミヤさんの場合は
その方法でゲノムデータが得られるか否かが問題ですよねえ。
フミヤさん。生殖器、成熟されてますか？」と言ってみたものの
さすがに高田も自身の演技に愉快になってきたのか
言葉の最後には自分の言葉に笑みがはみ出して

小さな笑い声まで漏らした。

必死に笑いをこらえる高田の言葉の真意を　フミヤは解す。

高田は　子供の風貌をしているフミヤが
自分の上司であることが我慢ならないのだ。
子供のくせにクローン依頼だとか
馬鹿じゃないかと言いたいのだ。
自分にとって気に入らない相手のために
仕事をするのが嫌なのだ。
お前は子供だと、ガキだと、
フミヤを嫌い侮っているのだ。

そんな高田の姿に　フミヤは苛立ちに任せ
自分の爪を強く噛み千切った。
そしてその爪の断片を　プッと音を立て　横へと吐き捨てる。
指先は深爪して　血が滲みはじめたが
フミヤは痛そうにする様子がないどころか
指先に滲む血を見て動揺する高田を見て
フミヤは可笑しそうに笑った。

白人で子供、ブロンズの髪をキラキラと揺らしながら
フミヤはカラカラと笑いながら　パイプ椅子から立ち
フミヤと高田の間にある長机に乗り
自分の指先から滲んだ血を　高田の頬にこすりつけた。

自分の血で汚れていく中年の顔を眺め楽しんだ後
静かな声で「殺すぞ？」とフミヤが呟くと
高田の目の色は一瞬で輝きを失い

フミヤへ「失礼しました」と小声で謝罪した。

その高田の萎縮した姿を見て満足したフミヤは
大きく息を吸い、はっきりとした口調で
「残念ながら生殖機能の検査の経験は無いし
今後もする予定はない。
だから僕の血液中にある
ゲノムの断片を繋ぎ直し代用してくれ」と言った後
あ、そうそう。と
「どうせ遺伝子いじるなら　ホントにいじってみてくれよ。
たとえば性遺伝子をオスからメスに変えるとか。
あと長生きされても困るので
寿命は短く設定しておいてくれ」と付け加えた。

ただのクローンの依頼だけだとふんでいた高田は
フミヤと予定外に気まずくなってしまったことや
ゲノムの断片をつなぎ合わせるという面倒な注文に
遺伝子工作という面倒を上乗せした条件を出されたので
イエスともノーとも言えないまま
どうしたもんかと次の言葉を捜していたが
そんな高田に対し　徹底的に自分の上位を示したいフミヤは
高田の言葉を待つことなく
高田の研究室にあった道具を使い
慣れた手つきで　さっさと採血を済ませてしまった。

「僕はいたって軽い気持ちだが
お前が軽い気持ちであることは　絶対許さない！」

そう言ってフミヤは
まだ生温い自分の血液の入ったスピッツを押し付け

高田に命を注文したのだった。

０３＋０４

高田にクローンを注文してから
フミヤは予想もしなかった動悸に
頻繁に悩ませられるようになった。

妙に後ろめたさが伴う動悸。

どこにいても　何をしていても　動悸がおさまらない。

手が震える。　息が薄く荒い。

これは一体なんなんだろう。

そう考えて悩む自分とはうらはらに
自分の心をすべて承知している自分もいた。

（もうすぐ僕と酷似した遺伝子データを握る存在が
この世に誕生し、僕の前へ現れる。

それは孤独の終わりだと期待していいのか。

可哀想な僕が　期待にどきどきしているのだ。
自分の中で喜びが膨らみ　はみ出しそうだ。

僕は　僕と出会う？
それとも　それは他人？

僕であれ　誰であれ　孤独が終わるのだろう。

孤独ではない　という状態は
どのような状態を指すのだろう？

ああ！　そんなことはどうでもいい。

どうしよう　とても怖いよ。
孤独しか知らないんだよ。
孤独以外全て怖いんだ。

まるで　ＬＯＶＥ　ＯＲ　ＤＩＥ。

愛か死か。どちらをチョイスすればいいんだ。

愛なんて　僕には怖くて選べないよ。

だからといって　死を選んだところで
動悸ぐらいでは　死ぬことも不可能だよ。

この幸せを期待しては
迷い　不安になる
夢見る愚かな脳を　誰か殺してくれ。

早く　誰か殺してくれ・・・！！！）

舞い上がる自分は　まるで躁。
鬱に叩き落される日が怖い。

喜びに浮かれる自分とは別の
もう一人の自分が意地悪に囁く。

オ前ハ　キット　死ヌダロウ。
嬉シクテ　キット　死ヌダロウ。
孤独トイウ　小サナ水槽カラ
愛トイウ　大海ニ　身ヲ落トソウト　シテイルノサ。
オ前ハ　金魚ノヨウニ　死ヌンダヨ。
金魚ノヨウニ　ショック死　スルンダヨ・・・

●

季節は　寒さ厳しい　本格的な冬になり
フミヤの身体の不快感は悪化する一方だったが
とうとう　ある朝　高田から
クローンが出来たと連絡が来た。

フミヤが直ぐにＫ－ＲＯＯＭへ行くと
高田が「お待ちしていました」と
上機嫌で研究室をフミヤを案内した。

そして高田は
巨大な円柱ガラスの中
羊水に漂う　薄桃色の肉塊を指した。
「これです。これがフミヤさんのクローンになります」

大人の拳ほどの大きさの肉塊は
頭部、腹部、そして手足が
小さいながらもしっかりと判別でき
人であることが一目見て理解が出来る状態にまで発育し

大きく膨らんだ腹から　母体とつながるためのへその緒が
培養装置の上部にある
特殊な蛋白質で出来たチューブと繋がり同化している。

大きな頭部。　膨らんだ腹部。
折り曲げられ　交差された　足。
手や足には青虫のよな小さな指。

よく見れば　顔には小さな鼻や唇の凹凸も確認できた。

しかし、何より目を引いたのは
薄く膜が張られた奥にある
二つの輝く眼球の存在だった。

「赤い・・・」フミヤは思わず言葉をもらした。

その呟きに高田が答える。

「すいませんねえ、フミヤさん。
依頼通りにフミヤさんのゲノムデータを基盤にしつつ
性別はメスに組み換え
寿命に携わるゲノムデータをいじってはみたものの
一部の染色体構造にミスをしてしまい
メラニン生成が少ない生態になってしまいましてね。
つまりは失敗作なんですよ、ハハハ。
この個体は破棄して
もう一度やりなおしできますが　どうしましょうかねえ？」

不本意を装っているが
これは確実に故意的なミスだと　フミヤは確信した。

（人の形をし、すでに生きている存在を
失敗作だということで　破棄する命令を
高田は僕にさせようとしているのだ。
つまり　高田は僕を　人殺しにしようとしているのだ。
本当に人を殺せるかと、僕に挑発しているんだ・・・！）

とことん腐た男だ、とフミヤは吐き気すら感じながら思ったが
高田には良心の呵責がないのか　可笑しそうに笑っている。

フミヤは一瞬、鋭く高田をにらみつけてやったが
すぐ目線を培養装置の中に浮かぶ胎児にやった。

胎児の眼球は　レンズの役割をし
体内の血液の色に染まっているのだろう。
まだ開くことのない瞼が
その美しい宝石を　じらすように隠し
肌の色も　血液の影響を受けて　暖かく染まっている。

フミヤは胎児から目が離せなくなっていた。

今まで感じたことの無い
強く熱く、でも不快ではない感情が
とめどなくこみ上げるのだ。

（なんて　暖かく魅力的な桃色なのだろう。
なんて　くすぐったい動きをするのだろう。
この気持ち　なんて表現したらいいのだろう？
言葉なんて　たった一言しか思いつかないよ。

なんて【可愛い】んだ！）

再びフミヤは　悪意で顔が緩みっぱなしの高田のほうを向き
「よくやった高田。この個体は僕が引き取ろう」と言った。

高田は驚きながらも　まだ頬を汚く歪ませながら
「いえいえ、創りなおしますよ」と破棄を促そうとしたが
「僕が良いと言っているんだ。
お前が気にすることではない」とフミヤに言葉を遮られた。

そして再びフミヤは
羊水の中を漂う胎児を眺めながら
「法律の通用しない生情会では
どんなに腐った人間でも　技術があれば　やっていける。
だが生情会も人の集まる　小さなコミュニティだ。
個人の持つ　道徳観・倫理観に任されているだけなのだからな。
僕との約束を守らない奴は　僕が法となり　処罰する。
つまり　この個体を破棄したら　僕が許さないってことだ」と
高田に釘を刺す言葉を残し　フミヤは研究室を後にした。

●

あれからフミヤは　毎日のようにＫ－ＲＯＯＭに通った。

高田のいない時間帯を狙って
自身が施設の管理者であることを活かし
Ｋ－ＲＯＯＭに行っては
クローンの泳ぐ培養装置の前にパイプ椅子を置き
ただ呆然と桃色の肉塊を眺める日々。

高田の遺伝子操作は成功したのだろう
彼女は他のクローンたちと違い
毎日　生まれ変わっているかのように
今では胎児から乳児へ
乳児から幼児へと成長していた。

しかし　会うたびに大きく成長し
人間らしい姿になっていくのに対し
股間の生殖器がいつまでも育たないのを眺めながら
自分のクローンでありながら
女という性を持っていることが不思議。

性が違うだけで　こんなにもオリジナル。

「クオリア」

初めて呼ぶ名前は美しすぎて
フミヤは声が少し上ずり　震えた。
しかし彼女は
その音に　その声に　静かに耳を寄せ
気持ちよさそうに培養水の中を泳いでいる。

「なあ、クオリア。
君は僕の中から生まれたはずなのに
君は手の届かないガラスの中。
君はありのままの姿で　僕の前にいるというのに
いつも僕は　君を感じていたいと望んでいるんだ。
僕をこんな気持ちにさせる君に
クオリアという名前は　ぴったりだと思わないか？」

クオリアは培養水の中
フミヤの言葉を　もっと聞きたいという表情で
ガラス壁に手を寄せ、頬を寄せた。

「この世に生き　生まれることは　怖くないか？」

クオリアの元へ音声は届いているのだろうか。
彼女は無邪気な表情で
ガラス壁に唇を寄せ　舌を出し遊んでいる。

「僕は心配だ。だって僕は狂ってるからな。
お前を創っておきながら　気まぐれに傷つけ
勝手な生き方しか出来ないことが目に見えてる」

フミヤは　自分の小さな手をガラス壁へと伸ばし
クオリアの頬や髪を撫でる仕草をした。

するとクオリアは　触れられてもいないのに
とても気持ちよさそうに目を細めて微笑んだ。

「君は本当に僕のクローンなのか？
僕はこんなに狂ってる上
身体の成長も止まった惨めな男だよ。
なのに君は　とても綺麗だ」

そう言った後　フミヤはガラス越しに
手を伸ばし　頬を寄せ　額を寄せると
クオリアも共に額を寄せ
二人は誰よりも近い場所で見つめ合う。

そして二人は　近いな　なんて
言ったり　言わなかったりで　クスクスと笑った。

クオリアは　フミヤの真似が好きだ。

フミヤの仕草を真似しては　頬を弾ませる。

もちろんフミヤも　クオリアが好きだ。

その姿を見るだけで　なんて胸が温まるんだろう。

そんなことを考えながら幼い二人は
ヒラヒラしたり　パクパクして
小さな遊びを楽しんでいたが
突然フミヤのポケットにある携帯が鳴る。

静寂を破る電子音とバイブレーターの音に
クオリアは驚いて水槽の中で暴れたので
フミヤは（驚かせてごめん！）という表情を見せ
慌てて携帯をポケットから取り出す。

鳴っていたのは電話ではなく　アラーム。

一日が始まるぞ、と
仕事が始まるぞ、と
高田がやってくるぞ、と。

「ごめんよ、クオリア。今日は帰るよ。

明日、君の誕生を楽しみにしている」
そう呟いて　クオリアに手を振ると
意味も解からないはずのクオリアが
ヒラリウフフと可愛く手を振り返したので
フミヤは思わず小さくガッツポーズをして
跳ねるように去っていった。

●

日付は変わり再び朝がやってきた。
今日もまた一段と寒い。

クオリアの培養装置を取り外す時間が近づき
フミヤは自分の仕事を中断し
クオリアのいるＫ－ＲＯＯＭへと向かう。

フミヤが高田の研究資料室にたどり着くと
普段は誰もいない場に高田を含む５人もの男が
青緑色の手術着で全身を包んで待機していた。

「フミヤさんが来られた。
ではそろそろ始めましょうか」と
既に前準備や打ち合わせは済ませていたのか
スタッフたちは研究室へと移動していく。

フミヤは高田を呼び止め
「培養装置を外すだけで
こんなに人数が必要なのか？」と問うと

「実際に作業に携わるのは二人だけです。
他は皆、今回のクローニングに興味を持ち
データを欲しがっている者ですよ」と答えた。

「僕はそんな話、一切聞いてないが」
「フミヤさんには関係ないことだと思ったのですが」
「僕が依頼したクローンだ。関係ないわけがないだろう」
「私の今回の仕事は
フミヤさんが望んだクローンを渡すことだと
認識してますんでね、ちゃんと今日お渡ししますよ？」
そんな会話をフミヤと高田は
周囲のスタッフに聞こえないように
小声で素早く交わしていたが
最終的にフミヤが　他のスタッフを考慮して
「お前の勝手を許すのは今回だけだからな。
しかしクローンを傷つけたり
健康を害するほどの過剰な検体の採取は
お前からちゃんと断ってくれよ」と譲った。

高田の研究室の奥に
さらに小さな小部屋があり
そこでクローンたちは産声をあげているらしく
クオリアの入った培養装置も
スタッフたちが　小部屋まで移動させる。

フミヤも何か手伝うことはないかと
他のスタッフと同じように
青緑色の手術着を借りて着用しようとしたが
サイズが合わなくて諦めた。

（今日は僕のクローンが誕生する
世界でたった一日の特別な日だというのに
子供のではその記念日の手伝いどころか
足手まといになる。それは今日は特別悔しいな。

僕は自分の非力さが常に不満だが
これが現実なのだから仕方が無い。
完全に受け入れられてるわけではないが
このような場面でうろたえるのは不細工だ。
ここは黙って　人に頼るしかないんだ・・・）

簡易なベッドの様な、机の様な
ステンレスの冷たい台の上へ培養装置が置かれ
高田がボタンを一つ押すと
培養装置の下部から中の液体が
トロトロと外へと流れはじめた。

立つことも　座ることも出来ないクオリアは
装置の水位が下がると共に体を沈ませ
液体が無くなる頃には　装置の底で丸く転がった。

フミヤは　それを眺めながら
昨日までのクオリアの姿を思い出して
（ああ、夢を見ていたのだ）と思った。

昨日までのクオリアは
いつもガラスの中で浮かんでいて
まるで羽の生えた妖精のように見えていた。

しかしそれも終わり。

これからは全て現実。

液体は流れ、妖精は地へ降りた。
もう二度と彼女が飛ぶことはない・・・。

丸く横たわる少女を見つめながら
周囲の大人と
大人になれなかった少年が産声を待つが
眠るよりも静かに　少女は動かない。

しばらく待って、さらに待って
待って　待って　待ってみたが
彼女の眠りは　夢を超え
どこまでも深いところへ堕ちて行ってる様だった。

「お、おい！大丈夫なのか？！」

静寂の中の　大きな不安に耐えられなくなり
フミヤは声を出したが　誰も返事はしないまま
スタッフ同士でコソコソと小声で何かを話すだけ。

そして誰も何も言わないまま
少女の肌をペチペチと叩き
刺激を与えてみるが
クオリアは黙ったまま　動くことも無かった。

「困りましたねえ」と高田が言葉を漏らした後は

心臓マッサージが始まり
研究室は重苦しい緊張感に包まれた。

胎児は羊水の中では
母体からへその緒を通して
栄養や酸素の供給があるが
母体から出た瞬間　産声を上げ
自身の肺で息をしなくては生きていけない。

つまり産声をあげていないということは
肺は動いておらず、酸素が取り入れられないのだ。

フミヤは高田や　周囲の目があったので
出来る限り平然を装うことに勤めていたが
心の中は　唯一無二の願いを念じていた。

（泣け・・・泣いてくれよクオリア）

そして心の中で
いつか読んだ美しい物語の一説を思い出して
それを祈るように暗唱した

【貴方の鳴き声は美しい。

だって　貴方の泣き声は
地球始まって以来始めての［産声］。

さあ、泣くんだ！

その声を響かせておくれ！

貴方の産声に　すべての生命が喜んでいる。
貴方の産声に　世界の音楽家たちも拍手を送る。

「どんなに多様な音の出る楽器でも
産声の波長は表現できていないのさ」

産声こそ　この世で最高の音楽なのだ】

（あぁ！早く僕の心に
その音楽の美と感動を与えておくれよ！）

そうフミヤが願った時
研究室に響き渡ったのは　産声ではなく
体内の酸素濃度を測定する装置。

甲高い音に　皆が装置に注目する中
スタッフの一人が検査結果を見て
気の抜けた声で「駄目ですね」と言った。

フミヤは装置の発した不快な電子音と
スタッフの軽いノリの言葉に　苛立ちが破裂。
高田たちを掻き分けて
クオリアの元へと近寄り
「泣け！　早く泣けよ！」と大声を出した。

乱暴な口調で怒鳴り
乱暴な手つきでクオリアを揺らすフミヤを見て
一度スタッフが止めようとしたが
「うるさい！」と一喝された。

フミヤは出せる限りの声で
クオリアに叫び続ける。

「お前は僕のクローンなんだろ！
誰が何度殺そうとしても　死ななかったし
僕はどんなに願っても　死ねなかったのに
何故お前はこんなに簡単に死ぬんだよ！」

そうやって怒鳴っても
クオリアは人形のように
首をブラブラと揺らすだけで
何も答えようともしない。

どんなに揺さぶって叫んでも
無視し続けるクオリアに
フミヤは悲しくて悲しくて
頬の中が狭く　硬く　酸っぱくなった。

大きな水滴が視界の端で
床に落ちていくのが見えたとき
フミヤは自分が
涙を流していることに気がついた。

そしてフミヤは

クオリアを抱くことも出来ないまま
ズルリと崩れ落ちた。

フミヤが動かないクオリアを前に
ポタポタと涙を落としていると
周囲はもう完全に［終わった］ものだと思い込み
可哀想な二人を見ることもなく
使った機材の片付けを始めた。

（クオリア・・・お前は所詮クローンだから
皆はこんなに簡単に
お前の命を諦めてしまったではないか！

だけどお前は本当にこれでいいのか？！

お前は人の遺伝子を授かっていながらも
人としての扱いを受けられないまま
死のうとしてるんだぞ！

人ならば　人として
尊重されなくては駄目だ！

己を粗末にされたら
何人に対してでも　怒れ！

この世に執着し
命にこだわるんだ！

僕と同じ遺伝子を持つならば

僕と同じ哲学を持つならば
僕と同じ想いならば

神も　摂理も　押し倒して

僕に喰いついて
生きてみろよ、クオリア！！！）

そしてフミヤは小さな手のひらで
クオリアの頬を　力いっぱい叩いた。

フミヤの目は
優しさの色は一切無く
自分を見捨てようとする
裏切り者への怒りで輝き
涙はもう
彼女への情熱の前に蒸発した。

高田やスタッフたちは
フミヤの行動に一瞬目をやったが
所詮は死体への粗暴だと
特に相手にしようとはしなかったが
床へと叩きつけられたクオリアは
手足を小さく動かしながら
小さな小さな産声をさえずりはじめた。

（生きてる！！！）

フミヤだけではなく
周囲のスタッフ皆が

寝言のような小さな産声に振り返る。

「いいぞ！　もっと泣け！」

フミヤはクオリアを高く抱き上げ
再び揺さぶり　大きな声で言葉をかけた。

揺さぶれば揺さぶるほど
クオリアの声は大きくなり
それと同時に
フミヤの胸の中で響く
祝福の声も大きくなってくる。

Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！
Ｃｏｎｇｒａｔｕｌａｔｉｏｎｓ！

お誕生日おめでとう！

一度緩んだ涙腺は
もう一度涙で溢れ
涙はフミヤの声を震わせた。

「最高だよ！
お前は世界一のｇｏｏｄ　ｇｉｒｌで
誰よりも　僕　だよ！」

クオリアの産声よりも
もしかしたらフミヤの歓喜の声のほうが
ずっと高らかだったかもしれない。

クオリアは泣きながらも
初めて見る涙に興味を示し
フミヤの頬に手を伸ばす。

クオリア、その涙は何の涙なんだい？
頬の痛みと　この世への興味と
どちらがお前の心に広がっているんだい？

涙で汚れたクオリアの手を
頬で抱きしめるように受け止めるフミヤ。

フミヤはその手が　嬉しくて　可愛くて
彼女を両手いっぱいに抱きしめたら
彼女の吐息や　舌の動きが　耳に近くて
鼓膜に響く音は　くすぐったく　卑猥。

フミヤは可笑しくて可笑しくて
泣き笑いが止められなかったんだ。

05

クオリアが誕生した。

フミヤは、クオリアと二人だけで
穏やかな日々が送れるなどという
甘い夢は見ていないつもりではあったが
クオリアは培養装置から出た後
突然の環境の変化に耐えられなかったのか
随分と衰弱してしまったので
すぐに保育器に入れられ
生情会の施設から　連れて帰るのは
また後日ということになり
少しガッカリしながらも
少し安心していた。

もともとフミヤは
自身のクローンを作ったところで
自分で育てる気など無く
生情会に提供し
将来のスタッフとして
提供するつもりでいたのだ。

それもクオリアと出会い
気が変わったわけなのだが
気が変わったからといって
フミヤ自身に子育ての経験などなければ
自分よりも小さな生き物と触れ合った経験もない。
いきなり人を育てようというのだから

無茶で無鉄砲で無謀を自覚していた。

今まで一人で日本の生活をし
仕事もしてきたフミヤは
初めて自分の身辺の世話と
クオリアの世話をしてくれるスタッフを募ったのだ。

クオリアの世話はもちろんのこと
自分がクオリアとの時間を作るために
仕事の助手にもなるスタッフ。

その募集に応募してきたスタッフが今日
フミヤの元へとやってくる予定なのだ。

朝7時。

フミヤは自宅にいた。

フミヤの自宅は田舎町の
閑静な住宅地にある
デザイナーズマンションの最上階。

このマンションに住むは
皆、生情会に何かしら関わっている人間で
建築を手がけたのも生情会のスタッフである。

リビングは床から天井まで伸びたガラス壁が
贅沢なほど　青空と陽光を浴びていた。

（まだ寒いが、空は春の色だ）

フミヤはそう思いながら
カーテンを閉めることもしないで
体中に太陽の光を浴び
パソコンの電源を入れ　メールチェックをし
静かで優雅な朝を満喫していた。

（今日が晴れで良かった。
新しく来るスタッフに　会って早々
僕が　雨や曇り、晴れじゃない日は
悲しくてやりきれない気持ちになる　なんて
どんな顔して説明すればいいのか判らないからな）

そんなことを考えながら
メールチェックを終え
少し机の前でぼんやりし
朝のカフェオレも飲み終えて
時計は約束の時間を５０分を超えようとしていた。

やっと部屋のインターフォンが鳴り
待ちくたびれて苛立つフミヤが玄関へ行くと
鍵を開ける前から
扉が叩かれ蹴られ音をたてていた。

「遅れてすいませんー！
開けてー！開けてーーー！」と女の声。

ロシアから日本にやってきて

文化の違いに驚くことは過去に何度もあったが
こんな堂々とした失礼をしてくれた人間は
フミヤにとって　この女が初めて。

優雅な時間を過ごしていたのに
遅刻で苛立たされた挙句　この騒音である。

（なんだこいつ。どこの獣だ！？）

フミヤはドアに手をかけ
騒音を止めるべく　扉を開けようとしたが
触れた扉からは　蹴られたときの振動。
このまま開けて
このままの状態で部屋に入られても
面倒見きれないじゃないか。

「静かにしろ！
静かにしないと開けられないだろ！」
扉ごしにフミヤは言ったが
「なんで？！　開けてよっ！
遅刻しながらも　一刻も早くと
やってきた私の努力を無駄にしないで！」と
なぜか女は扉の前で叫び暴れることが
自分の誠意の表現だと思っているらしく
全く落ち着こうとはしない。

「遅刻は遅刻だ！」
「走ってきたんだから
ちょっとはオマケしてよ！」
「それを望むなら

僕の命令に耳を傾けろ！」
「は？！命令？！
君ってすっごく可愛くない子ね！
おねーさん怒らせたら後で後悔するわよ！？」
「・・・・・」

ここまで話して理解した。
女は　フミヤの身の上のことを
何一つ聞かされないまま
ここへやってきたのだということを。

そして彼女は　フミヤの声を聞き
子供だと思っていて
自分のパートナーとなる人間は
また別にいるもんだと勘違いしているのだ。

（これだけ取り乱した女が
自分の雇い主が　僕であることを知ったら
どんな顔して詫びるんだろうな！）

そう思ったら　自然と口元が緩む。

そしてフミヤは鍵を開け
女を室内に入れた。

「私の名前は田辺よ、ヨ・ロ・シ・ク！」
そう言って田辺は
フミヤの櫛の通った髪を
ぐちゃぐちゃと混ぜっかえした。

こんな無礼　こんな子ども扱い
普段なら絶対に許さないフミヤだが
やがて解かる真実に
田辺が焦り戸惑う姿を想像すると
可笑しくてしょうがないので
黙って泳がせてやる。

田辺は黒のスーツを着用していたが
日本では考えられないほど
胸元を大胆に開け
スカートの丈も随分と短かった。

ふと振り返ると
玄関に脱いできた靴も
一般のパンプスと違い
随分とヒールが高い。

「日本でもそんな服、売ってるんだな」
そんなことを意地悪く言ってやろうと思ったが
フミヤの身長では　田辺の胸元が目の前に現れる。

言葉は口から出てきたものの
目のやり場に困り　視線も言葉も　少し泳いだ。

「まあね。
私、肌を見せびらかして歩くのが大好きだから。
君はこぉいうのは好き？」

そう言って女はジャケットを広げ
胸元を堂々とフミヤに見せつけた。

「さあ？どうだろうな」
ニヤニヤとしながらフミヤが答えると
「フーン、君はそんなに女の子は好きじゃないのね
つまんないなー」と
田辺はフミヤを鼻で笑った。

フミヤは田辺をリビングのソファーに座らせ
自分は側にあるＰＣデスクの上へと
飛び登り　座った。

デスクに座るフミヤと
ソファーに座る田辺。

この状態では小さなフミヤも
田辺より目線が高い場所になる。

窓の光がフミヤの背後から差し
女からは逆行になり
フミヤの細かい表情は眩しく見えない。

田辺という女。
５０分も遅刻してきて
仕事が出来る女とは思えないが
自分が誰に呼ばれて
ここに来ているのかぐらいは
把握しているのだろう。

フミヤは後々

大笑い出来ることを期待しながら
「僕がフミヤだ」と田辺に言った。

たった一息で言えてしまった
小さな暴露ではあったが
フミヤはこの一言で
どんなに面白いものが見れるのだろうと
ワクワクしていたのだが
田辺は特に大きなアクションもしなければ
フミヤが期待したような
あわてふためくようなことはしなかった。

それどころか「あなたがフミヤさんなんですね！
すっごく若い人だってのは聞いてたんですが
こんなに若くて可愛い人だとは知りませんでした！」なんて
見苦しさを一切見せることなく
さっきまでの悪態は爽やかに捨ててしまった。

それを見てフミヤは
（場の空気を　自分の都合の良い流れに
するのが上手い女だ）と思った。

さて、田辺とかいう女。
雇う気にはなれそうにないし
どうやって帰らせようかと考えながら
「さっきまでの僕への態度は
酷いもんだったな」とフミヤが言うと
「普段から私はこんな感じです」と
しゃあしゃあと田辺は答えた。

普段からだと
さっきまでの行為に　恥を感じる様子もなく
堂々と自己主張できるとは
この田辺とかいう女
どれだけ図太い女なんだろう、と
フミヤは少々興味を持ったが
「そのような態度では
僕と仕事をするのは無理だ」と
静かにキッパリと言った。

すると田辺は
「ちょっと！態度に問題があるのは
そっちも同じでしょ？！
子供のフリして
私が無礼をするのを
面白おかしく眺めてたわけなんだから
そんな状態で判断されるって
ほんっと気分悪いですよ！」と
真剣に怒り出し
ソファーの前に置いてあるローテーブルを
指先で軽く叩いた。

それは小さな音ではあったが
パン！と跳ねっ返る音を発した。

萎縮するフミヤの心臓。

しかしフミヤは
そんな自分の気の弱さなど
誰にも見せはしないし

感づかせることもないことだけは
精進に精進を重ねていたので
田辺にはきっと
フミヤの胸の痛みなど
全く届いてはいないだろう。

だが、フミヤの胸は
その音に反応していたのは事実。

自分の弱さを隠すため
虚勢を張らなくてはならないという
面倒なストレスがフミヤに科せられたため
怒りが瞬時にフミヤの胃から溢れ出した。

「お前の最大に気に入らない点は
そのように物音を立てて
自分の意見を言葉以外で表現しようとする
野蛮な態度だ！」と
フミヤも田辺に負けない勢いで
声を荒げて答えた。

すると田辺は
フミヤの怒鳴り声に驚くこともなく
妙に落ち着いた表情で
「ちょ〜〜〜〜・・・っと、待って！」と
手のひらをフミヤにかざし
ふぅ　と息を吸って　吐いた。

「今のフミヤさんの意見はもっともです。
先ほどの態度は私が悪かったと反省します。

しかし、フミヤさんが望まれる人材とは
どのような人材なのですか?!
それをお聞きしてから　適していないかどうかを
私にも判断させてください!
そうじゃなきゃ納得いかないですよ!」

田辺が納得しようと、しまいと
雇う、雇わないの判断は
フミヤが全てを任されるべきなのだが
簡単には諦めないと　田辺の眼差しが言った。

どんなにまっすぐに見つめられようと
フミヤは（めちゃくちゃな論だ）と思ったし
田辺はどうも　肝も据わりすぎていて
胸や足をさらしてるわりに
女という印象は薄くなり
まるで男が座っているかのようだ　なんて
そんなことまで思っていた。

肝が据わっているからこそ
フミヤのパートナーとして
選ばれてきた女なのかもしれないが
それにしても　面倒で五月蝿い女だ。

「じゃあ逆に聞くが
お前はここに何しに来たんだ?」とフミヤが問うと

「フミヤさんのお世話です!」と
田辺は自信満々で即答したので
思わず「違う!」と反論した。

「世話は世話でも、僕の世話じゃない！
僕が募ったのは
女の乳児の世話が出来るスタッフだ！」

フミヤがそう言うと
女は少し肩を落とし
「あ～、乳児は私には無理かも」と呟いた。

それから二人は
しばらく黙って
お互いがこれからどうしたものかと
言葉や行動を探していた。

窓の外に広がる空は
二人の気まずい空気を読んだのか
雲が太陽を覆い
静かに部屋を薄暗くさせる。

空が曇ることで
眩しさで消されていたフミヤの表情が
田辺にも見えるようになっていく。

フミヤの表情は
さっきの怒りは引き
無表情で　情を一切含まない声で
「結構あっさりと諦めるんだな。
えらく威勢がいいから
もう少し喰いついてくると思ったが」
そう話しかけると

田辺は「だってぇ」と甘ったるい声を出し
ソファーに深く座りなおしながら言う。

「フミヤさんの秘書としての仕事には
自信がありましたし
世話する相手がフミヤさんぐらい
大きな子供なら良かったんですが
この仕事、赤ちゃんが相手なんですよね？

私、赤ちゃんの世話どころか
相手すらした経験ありませんからね。

オムツの取替えから沐浴の手順。
離乳食も作れないし
食べものアレルギーなどの配慮なんて
絶対無理ですし
歯磨きも爪きりも不安だし
子供特有の病気に
予防接種の知識もありませんしね！

あと、そうそう。
夜泣きの相手は無理というよりお断りですよ。
私、夜は遊びたいし
お酒呑みたいですもん！」
なんて気だるそうに言うわりには
息継ぎもしない勢いで　言い切った。

それから田辺は
妙にふっきれた清清しい表情で
「じゃ、帰ります！」なんて言い

ソファーから立ち上がり
リビングを出ようとした。

フミヤは腰掛けていたデスクから飛び降り
田辺を引き止めようと　腕を掴んだ。
「お、おい！　ちょっと待て！」

そのときフミヤの手のひらに
女の腕ではない硬いものが
袖の内側に巻かれていることに気がついた。

「これは・・・銃か？」

護身用の銃なら
フミヤも常に手の届くところに
用意しているが
日本で　自分以外で
スタンガンなどではなく
本物の銃を持ち歩いている人間を
未だ見たことが無かったので
フミヤは少々驚いた。

「ピンポン。言ったじゃないですか。
私は秘書としては出来る女ですよ。
どんな秘密も守りますし
どんな危険なこともしますよ。
フミヤさんが指摘した
私の野蛮さは、私をいつも守ってくれた
最大の長所なんですよね！」と
明るく言ったかと思うと

田辺の鞄から数冊の本がこぼれ落ちた。
その本はどれも育児書。
フミヤはその本を拾ってみると
表紙裏表紙はくたびれた様子で
ところどころ付箋が張られてあった。

「ほら、ね。
私って隙もなければ
努力も怠らない女なんですよ」と
満腹の蛇のように
田辺は目を薄く細めて笑った。

フミヤは　大きな獲物を逃してしまうような
そんな気がしてきた。

生情会で働く女は
会のほうが指示しないかぎりは
皆、裏方の仕事に徹する人生を選ぶ。

だが　この女は違う様だ。

フミヤの前に出ても　臆することもなければ
自分が失礼を犯したと思ったとき
素直にそれを認め　謝罪までしたじゃないか。

今日、これまでの田辺の言動を思い返しながら
「この仕事。お前はやる気があるのか？」と
フミヤは田辺に尋ねた。

「それはフミヤさんの意思次第ですよ。
私は与えられた仕事は必ずやり遂げますし
やる気がないなんて
私には有り得ませんからご安心を。
だけど　フミヤさんのほうこそ
私を雇う勇気ってあります？」

「挑戦的な態度だな」

「当然ですよ。
だって私、働くの大好きですから。
だから雇うのが大好きな人じゃないと
私と働くには釣り合わないですよ？」

田辺のその言葉を聞いて
それがただの虚勢であることは
なんとなくフミヤには解かっていた。

本当に隙もなく
完璧な仕事が出来る人間が
自分の鞄から
うっかり本を落としたりはしないだろう。

いや、本を落としたのは作為的だったのか？
・・・謎があり、なかなか面白い女だ。

「いいだろう。その挑戦を受けよう」
フミヤがそう言うと
田辺は表情をコロっと変えて

目をキラキラさせながら
小さな声で「やったっ！」と言った。

「しかし！」
浮かれる田辺を
即座に沈めるかのように
言葉で遮るフミヤ。

「乳児の世話は五月蝿くて、乱暴で
遅刻までしてくるお前には任せられない」

そこまでフミヤが言うと
（じゃあ何するの？）と言わんばかりに
田辺は不思議そうな表情でフミヤを見つめ
次の言葉を待った。

「育児について、僕に教えてくれないか」

フミヤがそういうと
田辺は吹き出し　声を上げて笑った。

フミヤは短い時間ではあったが
この女がかなり図々しい気質であることは
察することが出来ていたので
女が笑い続けるのを
しばらくは黙って待っていたが
いつまでも腹を抱えて笑ってるので
フミヤはそろそろと表情を変えて
不機嫌であることを田辺に表現した。

「ああ、すいませんすいません。
さすがフミヤさんだなぁって思っちゃったら
笑いが止まらなくて！うっぷぷぷ」と田辺が言うので
「さすが、と思ってくれてるわりには
随分と可笑しそうに笑っていたが」と
フミヤは嫌味を込めて言うと
「身内の育児なんて他人に任せてしまうより
手探りでもいいから
自分でやるべきだと思うんで
私もそれがいいと思います。
笑っちゃったのは
フミヤさんとの仕事って
前もって聞いてたよりも
いい仕事だなって思ったら、嬉しくて！」

田辺はそう言うと
再びフミヤの髪を
ぐしゃぐしゃっと引っ掻き回した。

初めに撫でられたときは
バカにしていると感じ
不快感を抱いていたが
さっき田辺が発した言葉が
とても真人間であることを感じさせたので
少し気を許し
撫でられたことに怒ることはしなかった。

しかしそのとき田辺の鞄の中から
さっき落とした本とは

また別の本が床へ落ちた。

その本のタイトル【男の子の育て方】。

フミヤも　田辺も
床に落ちた本のタイトルに釘付けになった。

「しょ、しょうがないじゃないですか！
私はフミヤさんの世話をするもんだと思い込んで
ここにやってきたんですから！
そりゃ勉強してきますよ！
・・・フミヤさんの育て方！！！」と
田辺は必死に自身をフォローしたが
みるみるうちに目つきが鋭くなるフミヤに
真の隙の無い仕事のなんたるかについて
仕事初日からクドクドと
フミヤから説教される羽目となった。

06

フミヤが玄関を開けると
外は青が青々しく輝き
低い空が春の訪れを教えていた。

「いい天気！」
共に部屋を出た田辺が
眩しそうに目を細めながら言ったので
フミヤはそれに対し「ああ」と短い返事を返す。

そして二人は田辺の車に乗り込み
生情会の研究施設まで向かうため高速に乗り
青空がさらに近くなった頃
ご機嫌に運転をする田辺の鼻歌が聞こえてきた。

フミヤは窓の外を眺める。

窓の外は山が連なり
景色は青空と新緑で溢れて
車が少し下り坂を走るとき
世界が広く見渡せるんだ。

「好きなんだ、この景色」
フミヤがポツリと気持ちを漏らすと
「これから私が送り迎えしますから
毎日見れますよ！」と田辺が誇らしげに答えた。

「毎日・・・じゃあ、いつかこの景色にも

飽きてしまう日は来るんだろうな」と
眩しいのか　切ないのか
フミヤは目を細めながら　首を窓に寄せ　呟く。

フミヤが少し背を丸めると
あっという間にソファーに体が沈んで
見えるものは斜め上にある空だけになって
空の青さに心まで青ざめていく。

（どうして僕は、いつもこんなに悲しいんだろう）

バスケットボールがゴールに入るような
謎の異物感が喉に生じ
フミヤは少し息苦しくなる。

こんなに美しい日差しの下
ふとフミヤの脳裏をよぎるのは
いつかみた惨劇の記憶と、己の罪の記憶。

（こんなに美しい世界の中でも　僕は僕。
世界が美しければ　美しいほど
まるで僕の人生じゃないみたいな気がするんだ）

心はまるで青空の中へと消えていく風船。
どんなに手を伸ばし
行かないでと願っても　遠く消えていく。

隣で悲しみに浸るフミヤを見て
田辺は「元気ないですね」と声をかける。

「私は男と仕事することに飽きてたので
隣に座るのが男じゃないってだけで
すごく新鮮に感じてますけどね？」
悪びれもなく田辺が言うので
（男か女かと尋ねられたら
僕も間違いなく男なんだがな）とフミヤは思った。

そんな言葉を皮切りに
フミヤはなんとなく気になったことを口にする。

「今までどんな仕事をしてたんだ？」
「んー。ハニートラップのスパイ？」
「ああ、なるほど」

そう言ってフミヤは
隣で運転する田辺をチラリと見たので
「あー！フミヤさんってば今、私のこと
ヤラシー目で見たでしょ！？」と
田辺が騒ぎ出したので
「見てない！」とか「見てた！」と
二人は散々言い合った後
田辺に「子供にはまだ早いっての！」と
ぴしゃりと言われてしまったので
フミヤは怒る気にもなれず　拗ねて　黙ってしまった。

●

生情会施設の内部。
フミヤと田辺は廊下を歩きながら
「クローンの入った保育器は　医療保護室に預けてるんだ」

「保育器があって、預かってくれる場所もあるなら
ずっと任せておけばいいじゃないですか」
「・・・田辺が自分で育てたほうがいいって
言ってたような気がするんだが」
「あ。言ったかも」なんて話ながら歩く。

医療保護室の扉にはＫＩＲＯＯＭのような
頑丈な施錠は施されておらず
コンビニの自動ドアのようにドアが開いた。

医療保護室は施設内の保健室。
簡易ベッドに、医療知識のあるスタッフが
常時数名待機している。

「フミヤさん。どうも」
室内にいたスタッフたちが
フミヤに気づき簡単に挨拶をする。
それに対しフミヤは「やあ、おつかれ」なんて
さらに軽い挨拶で答えるので
口を慎むということを知らない田辺は
「フミヤさんってホントに偉いんだ」と呟いた。

保護室の奥にある扉を開けると
様々な医療機器がいたるところに配属された
落ち着けそうにない入院設備のある部屋があり
クオリアの保育器は　そこに配置されていた。

「あれが僕のクローンだ」と
田辺に解かるようにと指をさしたとき

「あ、フミヤさん」と誰かがフミヤを呼び止める。
振り返ると白衣の男が微笑みながら近づく。
そして男は　田辺に気がついて
「こちらは？」と尋ねてきたので
「僕の秘書で、田辺だ」とフミヤは答え
田辺が「どうも」と後に続いた。

「市村です、よろしくお願いします」
男はそう言って田辺の方に顔を向けたが
その視線はあっという間に胸元に堕ち
「あの、なんていうか。
魅力的な方・・・ですね」なんて言うので
田辺は「ええ、よく存じています」と答えていた。

フミヤは市村の様子を見ながら
（やっぱり胸元を見るんだ）と思ったり
田辺の受け答えを見て
（逞しい女だな）と冷ややかに観察しつつも
「市村は新人なんだ、手加減してやれ」と
田辺に小声で注意すると
「私のほうが新人だと思うんですが」と
田辺は納得がいかないという表情をした。

不機嫌になった秘書を構うことなく
「クローンの様子はどうだ？」と
フミヤは用件を切り出すと
「ああ、そうでした」と
市村は顔を引き締めなおし

保育器の側まで歩を進めた。
「ここにきたときは衰弱していましたが
もう随分と回復していますよ」と
市村は嬉しそうに答え
二人を保育器まで案内する。

保育器の中ではクオリアが瞳をパッチリと開いて
言葉にならない音を　口の中で奏でながら
目に入る全ての情報に夢中になっていた。

クオリアを見た田辺は
「ひゃ～！こんなにちっちゃいんだ」と
口元を押さえながら息声で言葉を漏らしたから
「まだ新生児ほどの発育レベルだからな」と
フミヤは冷静な言葉を添えた。

「それで、検査結果は？」
フミヤが　そう尋ねると
市村が側にあった棚から書類を取り出し
フミヤに手渡した。

「やはりクローン特有の
細胞の老化が見受けられ
テロメアも健康な新生児に比べると随分短く
フミヤさんの現在の細胞の状態と
ほぼ同じ状態を保っている様です」

市村の言葉を聞き
苦い表情をしたフミヤは

「そうか」と答えた後
さらに「ほかには？」と尋ねると
「あと、ご存知だとは思いますが
彼女はアルビノですね。
今現在は他の異常はみられません」と市村が言ったので
もうフミヤは返事をすることしないで　無言で頷いた。

「僕が望んで創ったクローンだ。
一般社会で生きていく必要など無いと言っても
様々な感情で胸が掻き毟られるな」

フミヤは　そう呟いた後
「早々だが、これは今日引き取るから
田辺と市村とで　もしもの時は
いつでも連携とれるように
二人でミーティングでもしておいてくれよ」と
一人で部屋を出て行ってしまった。

07

田辺は去っていくフミヤを眺めた後
「では市村さん、少し時間いただけます？」と
ひらりと振り返り　市村に話しかけた。
「ええ、連携ですね。いいですよ」
市村はそう言うと白衣の裾をめくり
自分のポケットの中からカード入れを取り出し
名刺を取り出し　田辺に差し出した。

「ありがとうございます。
でも私、今日からの勤務なんで
まだ名刺が無く、手書きになりますが・・・」
そう言うと田辺は
自分のバッグからカード入れを取り出し
過去に使っていたであろう自分の名刺の裏に
ボールペンで自分の名前と携帯電話を記述し
それを市村に手渡した。

田辺はそのまま「では」と軽く会釈して
部屋を出ようとしたので
市村が「待って」と田辺を引き止めた。

「ほかに何か？」

「あの・・・フミヤさんは
何故このクローンを作ったのでしょうか？」

「それはフミヤさんに直接お聞きになっては？」

申し訳なさそうにして
田辺を引き止めた市村だったが
やがて真剣な眼差しになり田辺に訴える。

「どんなに強い人でも
自分の側に病気の人がいると
心配して気を病みます。
フミヤさんは強い人ではないから
あの子と共に生きていくことは
きっと、一人では無理だと思うんです」

フミヤから新人だと聞いていたこともあり
頼りなく感じていた市村の声が
穏やかで落ち着いていて
田辺もその声に立ち向かうように
耳を澄ませて　言葉を聞く。

「あなたの力が必要です」

市村はそう言って
自分の右手を田辺へと差し出した。

差し出された手を少し眺めて
この手の意味を一通り探した後
自分の右手を差し出し　握手を交わす。

握手の意味。
それは田辺には見つけることは出来なかった。

だから田辺は手を差し出すことは出来ても
その手を握り返すことなく
さっと手をふり解く。

この手は誠意？　それとも下心？

長くスパイとして生きてしまった田辺には
市村の声も言葉も眼差しも
全部が真っ直ぐで真っ白で
自分が蒸発させられてしまいそうな純真。

（演じなきゃ）と田辺は咄嗟に思った。

堂々としていて
怖いものなんてなくて
ビジネスライクな自分を。

「医学的な知識は私には無いので
市村さんに頼ることも多いと思います。
その分、雑用は私が担当するつもりでいるので
なんなりと申してください」

変な緊張と演技で固められた
ビジネスの会話を市村に言った後は
もう引き止められないようにと
田辺は逃げるように医療保護室を出た。

●

人気の無い　限りなく白に近い　灰色の廊下。

まっすぐ伸びているようで
ほんの少し弧を描く廊下に沿って田辺は歩く。

（ちょっと！
ここの施設に来たの初めてで
早速私、迷子なんだけど！）

頭の中でそんなツッコミを
相手もいないのに入れてみる。

誰もいない廊下で
フミヤはどこへいったのかと
周囲を見渡して考えていると
「田辺！」と
名前を呼ばれたのが聞こえたので
その声がする方を見ると
クオリアを抱いたフミヤが
こっちだ、と手招きしていた。

「どうだ、市村と連携は取れそうか？」
そう言いながら歩み寄ってきたフミヤに
「あの市村って人、超や～り～に～く～い！」と言い
田辺はフミヤに甘えるようにしがみつく。

フミヤは田辺の大胆な行為に動じることなく
冷静なまま腕をすり抜け「へぇ」と意外そうに言った。

「市村は生情会では珍しい
真面目で良い奴だと思ったんだが」

「そうなんでしょうけど
私としては真面目すぎて・・・引く」

「まあそう言うな。
ほかにクオリアの主治医になってくれそうな
人当たりの良い医者はここにはいないんだ。
上手く付き合ってくれよ」

フミヤがそうやって宥めると
「これもお仕事ですもんね、はぁい」と
田辺は子供みたいな声で返事をした。

それからフミヤは　田辺を連れて
自分の研究室にて
データの取り方や　装置の扱いを説明し
これからのお互いの仕事のスタイルを相談した。

朝の面接の時と同様
田辺は仕事に意欲を見せ
フミヤの教えることを　よく聞き
「任せてください」と頼もしい返事まで返していた。

どうやら田辺は完全な素人ではなく
スパイの業務内で
医学系の研究に携わったこともあった上
様々な企業や施設にもぐりこんだ経験もあったので
この正常会Dブロックという組織が
どのように成り立っているのかの理解も早く

予定よりも多くの業務を田辺に任せることになった。
新人には負担が大きすぎるかと思われる
その業務内容の多さに
申し訳なさすら感じながらも
自宅でクオリアと過ごす時間を
ゆっくり作ることが出来そうだと
フミヤはとても喜んだのだが

それは田辺にとっても都合が良かったらしく
「まだ住む家が見つかってなかったんで
フミヤさんの研究室を
つかの間の宿代わりに使わせてもらいます」と喜んだ。

●

一通り田辺とのミーティングを終え
フミヤたちは医療保護室から
クオリアを引き取った後
帰宅するために　再び田辺の車に乗り込んだ。

フミヤは改めて今日一日の出来事を振り返り
言動が荒々しく図々しくある田辺ではあるが
それゆえの話しやすさと

スパイをしてたというだけあって
思いのほか万能であることを知り
これからの生活の中
仕事に関しては安堵できそうだと思っていた。

しかしそれらを全て考慮してみると
一つの疑問が浮上。

再び田辺の運転する車に揺られながら
フミヤはその疑問を田辺に尋ねる。

「今日の遅刻の理由って何だったんだ？」

田辺は「あ～」と
会話の合間を消すように
意味も無い声を出してから
「今朝、急遽配属されたからですよ」と答えた。

「今朝？　おかしいな。
クローンを作るとなったときから
人事部に人材を募るようにといっておいたし
今日スタッフが家へやってくるということも
数日前から聞いてたんだが」

「私の予想では
きっと人材は別に用意されてたんだと思いますよ。
だけどそれは私のようなスパイ上がりの人間ではなく
保育の専門知識のある箱庭育ちのお嬢様で
いざフミヤさんの下で働くことが怖くなって
急遽逃げたか断ったかではないかと」

フミヤは「ほう」と相槌は打ってみたものの
何故　自分の元で働くことから
スタッフが逃げるのかが解からなかったので
さらに「何故？」と会話の続きを促した。

「きっとそのスタッフも私と一緒で
フミヤさんみたいな少年と
そのクローンである乳児の育児が仕事だと
思い込んでたんだと思うんですよ。

だけど実際はフミヤさんは子供ではないことを知り
そして　それだけではない情報も
なんらかの形で耳に入ったのが原因ではないかと。

フミヤさんって2・3人
殺しちゃったりしてません？」

フミヤは確信を突いた田辺の言葉に驚き
ふと　その横顔を見上げてみる。

時間はもう夜。
車内は暗く
高速道路ばかりが川のように連なり輝いて
田辺の表情は読み取ることが出来ない。

「その考えの根拠は？」

「子供が生情会で優位に立つためには
相当なインパクトが必要なんじゃないかと思って」

「なるほど」

フミヤがそう言うと
田辺は自分の考えに

よほど自信があったようで
彼女の耳にぶら下がっている
大きなゴールドのピアスが
フフフと揺れて光った。

田辺の勘の良さが
どこまで自分を嗅ぎ分けてるのかと
非常に気になったが
自分の部下である女の思考に
関心があるように悟られるのも　癪である。

フミヤは無関心を装うために
窓の外の景色へと視線を移してみたが
外が暗かったため　ガラスは鏡となり
車内で運転する田辺を鮮明に映し出した。

窓ガラスに映る田辺に話しかける。

「それだけ解かっていながら
僕と向き合えるとは　見上げた度胸だよ」

「セックスさえなければ私は無敵なんです」

「嫌いなんだ。好きそうなのに」

本当に意外だと思って　フミヤがそう呟くと
「したこともないくせに！」と田辺が怒ったので
「さあ、どうだろうな」と意味深に返してみたが
何も知らない田辺のため息交じりの言葉
「見た目は子供でも

中身はただのオヤジだからしょうがないか」で
フミヤはまた　拗ねて　黙ってしまったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2839r/

クオリア

2011年10月8日20時10分発行